

旗山神社と三国名勝図絵



鎌倉時代に創建されたともいわれる旗山神社。島津氏が山中の竹を戦いの旗竿に使ったことから旗山と呼ばれるようになったと伝えられます。三国名勝図絵にも描かれる石垣跡や仁王像も見ることができます。秋の大祭時期は境内のイチョウが見ごろを迎え、多くの参拝者や観光客でにぎわう観光スポットに。



池田旗山の神舞



昭和2年に出生を祝い舞っている記録が残されていることから100年ほど前には存在していたとされます。1746年から旧串良町下小原に伝わる神舞と酷似していることから、300年ほど前には池田旗山に伝わり、独自に変化しながら継承されたとも推測され、現在は10種の舞が受け継がれています。



樹齢千年を超える大楠



推定樹齢は1,000年以上とされる旗山神社の大楠。名勝誌にも「この社の前に日本の神木がある」と記されており、幹回りは16m、根回りは43m、繁茂範囲は6.5アールにもなります。根元は焚火により焼けた跡があり空洞になっていますが、その生命力と壮大さ、神秘的な魅力からパワースポットとしても人気。

そこに込められた感謝と願い

池田旗山神舞

平穏な日常に感謝し、節目を祝い、地域の安泰を願って、三百年以上前から奉納されてきた池田旗山の神舞。

その歴史は昭和39年の奉納を最後に、28年間も途絶えていました。

平成4年。復活を望む声に押され、有志が立ち上がります。

古老たちに指導を仰ぎ、途絶えかけていた10種の神舞を復元。

そして今日まで継承してきました。

しかし、平成25年を最後に8年間、神舞は奉納されずにいます。

長い時間のなかで変化を遂げ続ける神舞という伝統文化。

そのあり方は、私たちに多くのことを語り掛け、

継承されてきた歴史の重みを伝えていきます。

令和3年11月13日。神舞は新たに変化しながら動きだしました。

受け継いできた人たち、継承しようとする人たちを特集します

神への感謝と願いを表現した神舞
変わらぬ継がれる思いを追います

平成25年11月28日。旗山神社の新嘗祭で神舞が奉納されました。太鼓と笛の音色に合わせ、激しく力強く舞う姿に、厳かな空気が漂います。宮司の前迫芳文さんによる霧島鬼神に続き、多力鬼神を舞った押領司純一さん。社殿で見守る関係者も息をのんで見守ります。池田旗山に伝わる神舞は、全国的には神楽と呼ばれる神への奉納舞。300年以上前から池田地区に伝わりと推測され、舞い手みずから口上を述べながら舞うなど、風土や文化を背景に独自に進化しながら継承されてきました。

神楽はかつて日本全国で盛んに行われていた日本最古の芸能で、一説によると古事記や日本書紀で神話として描かれる「天岩戸伝説」にまでさかのぼります。天岩戸と呼ばれる洞窟に隠れた太陽の神、天照大御神を誘い出すために天鈿女命が洞窟の前で舞い、剛力の神、天手力男が隙をみて重たい岩の戸を取り払ったことが始まりと言われています。

五穀の豊穡を祈る祈年祭や、収穫への感謝を伝える新嘗祭といった祭

事で、神への奉納として舞われる神舞。祭りの語源は「祀る」や「奉る」に由来すると言われ、日本では太古から神々へ願い、感謝し、そして祀ってきました。神社は私たちにとても身近な存在で、家族の健康や子どもの健やかな成長、合格祈願や初詣、結婚式や年中行事など今でも多くの人が訪れます。日ごろの感謝を伝え、これからも平穏な日常が続くことをいつの時代でも願うからです。人々に寄り添い、生活に密着しながらこれまで継がれてきた祭り。各地で姿を消していく祭りや風習、そして神舞など伝統文化や地域芸能は今後どのような形で受け継がれていくのでしょうか。変わりゆく社会に対応し、変化を遂げながら今に伝わる神舞は多くのことを私たちに語りかけています。前回の奉納から8年。池田旗山の神舞継承に向け動き出した人たちの「思い」を追いました。